かぐらおか

（題字は初代学長　山田守英氏）

第 89 号

平成８年12月２日

編集　旭川医科大学
　　厚生補導委員会
発行　旭川医科大学教務部学生課

（写真撮影　実験実習機器センター　宮川　清志）　　雪　化　粧

アイルランドと私……石川　睦男… 2
おもしろき こともなき世を おもしろく…小林　吉史… 3
私にとっての日本……
　サントス セベリーノ バルボーザ ドス… 4
解剖学実習を終えて……四十坊克也… 5
解剖学実習を終えて……井上　明子… 5
クラブ今昔
　空手道部今昔……石川　慶大… 6
　聖書研究会……豊島　優人… 6
研究室紹介……英　　語… 7
解剖体慰霊式…… 7
体育大会実施される…… 7
訃　報…… 8
スキー教室参加受付中…… 8
旭川医科大学公開講座実施される…… 8
教官の異動…… 8
窓　外……阿部　典子… 8

アイルランドと私

産婦人科学講座　教授　石　川　睦　男

1992年８月、スペインのコスタブラバで開催される生殖医学に関するシンポジウムに参加する機会を利用して、ロンドンから、ダブリンを経由して、24時間にも満たない、慌しいゴルウェイ訪問が、私がアィルランドと関わりを持った最初であった。ユニバーシィティカレッジの生化学教室のFottrell教授との研究に関する意見交換が目的であった。この教室では唾液中のプロゲステロンなどの性ステロイドホルモンの測定の開発が行なわれており、協同研究の可能性について話し合った。

東海岸のダブリンから、西海岸のゴルウェイまでは、丁度、アイルランドを横断する形で、鮮やかなグリーンのクローバーのマークのアイリンガスという航空会社の小さなプロペラ機を利用した。片側は１人席、もう一方は２人席で、ケルト系らしい、大柄のスチュワーデスは、立ち上がった時は常に首を曲げていなければならないほどであった。

空港には、ガリバーの国らしく、大男のFottrell教授が自から出迎えてくれた。早速彼の車で研究室へ行き、意見交換の後、協同研究をしようということに話がまとまった。

その後、初対面の私は自宅に招かれアフタヌーンティならぬアフタヌーンブランディを一寸いただき、夜はアイリシュディナーに御招待いただいた。オイスター、アトランティックサーモンと黒いギネスビールをエンジョイし、私はたちまちアイルランド党になってしまった。

幸い、この唾液中の性ステロイド測定の開発計画は、日本の企業からの研究費も導入され、1994年から玉手健一助手が一年間、アイルランドに留学して測定法を確立させた。この間にも私は２回、研究打ち合わせのためゴルウェイを訪問しているが、特に印象的だったのは1995年１月17日の神戸の震災の時であった。ゴルウェイ倒着当日、何気なしにテレビを見ていると、関東大震災の様な映象が映った。それがその時の神戸に起こっていることだと判断できるまでには、少し時間が必要であった。神戸には親しい友人も居り、電話をしたが、なかなか通じずイライラと気をもんだ。翌日、コロンブスが、アメリカ大陸発見の旅に出る時、最後にヨーロッパを離れる時立寄ったという教会に行くと、私が日本人であることを知ったアイルランドの人々が、会う人ごとに、なぐさめと、心のこもったお見舞いの言葉をかけて来て、その素朴で人情に溢れたアイリッシュ気質が心に浸みた。

1995年には文部省の在外研究員として、高岡康男助手が留学。今度はエストラディオール測定の開発が目的であった。唾液によるホルモンの測定技術が確立することにより、非侵襲的、連続的にしかも家庭で検体を採取することが可能となり、黄体機能、ホルモン補充療法の評価が極めて容易となった。

数年に亘る研究交流の結果、本年６月より外国人特別留学生として、今度はゴルウェイから、Mark Griffin君が1年間の予定で来旭した。彼は到着直後から、婦人科癌の分子生物学的研究を精力的に行なっている。今やほとんどなくなった、手作りパンを120年続けて作っている老舗のベーカリーの三男である彼は、小さなゴルウェイの町のとびっきり美人で明かるく、人気者であるお母さんの子らしく、その積極性と明かるさは、他に４人居る外国人留学生にも故国を離れたさびしさを忘れさせることにも役立っているようである。

アイルランドのナショナルカラーは明かるいグリーンで私の好きな色であるが、それは雨が多く、一年中グリーンのあせることのないアイルランドの自然に負うところが多いようである。そのせいか、アイルランドの人は実にゴルフが好きで、散歩をする様な気分でゴルフをする様である。夕方ハーフだけとか休みの日に朝７時位にフラリとクラブハウスを訪れ、車の中から、キャディバックのキャリーを引き出し、それにキャディバックを積んでゆっくり回る。コースは日本の手入れの行き届いた芸術作品の様なものとは異なり、ラフはきつく、荒れているようにさえ見える。しかも、リプレイス、ＯＫはプライベートであってもしない様である。Fottrell教授夫妻も、ことの外ゴルフは好きらしく、何度か誘われてプレーをしたが、腕前は仲々のものであった。一見、手入れをしていない様に見えるコースだが、毎日、きっちり芝刈り、水やりはされていることは、アイルランドのゴルフコースの名誉のために付け加えておこう。要するに、自然のありのままの状態を大切に保っているというコースなのであろう。

アイルランドの学生は大変に勤勉で、よく勉強しており、素晴しい人材が育っており、今や、アイルランドの経済はヨーロッパで一番の経済成長率を誇る様になって来ている。

アイルランド讃歌になってしまった様であるが、ヨーロッパ大陸とアメリカに狭まれた、ユリシーズを書いたジョイスの国、アイルランドは、私の大好きな国の１つとなった。

ギネス発生のアイルランドのパブについては又、別の機会に譲ることにする。

おもしろき こともなき世を おもしろく…

第８期生　小　林　吉　史

過日『卒業後10年に思うこと』という企画で文章を書くことを依頼され、突然のことに困却すると同時に、同様の題名の文章がのっている『かぐらおか』を斜め読みし、すぐ捨ててしまう（ごめんなさい）ことを繰り返してまいりましたが、遂に己もその逆の立場に立ってしまったことが当然ながら信じられず、苟も大学の公的出版物に自分の顔写真と拙文が晒されることを想像して何とも言えない気持ちになったものです。

ところで考えてみるに、何故このような企画が存在するのかという疑問にぶちあたるわけです。新入生、新卒生に生きの良い将来の抱負、意気込みを述べさせるのならば理解できますが、私のような卒後10年もたってしまった凡人に今更景気の良い話があろうはずもありません。従って内容も自ずと勢いの乏しい、過去を振り返る郷愁的なものとなることは否めないわけです。果たして10年という歳月にどのような意味があるのでありましょうか。

たしかに周りを見回すと、自分より年下の輩が多い始末。其奴らに大阪万博のアメリカ館は東京ドームとそっくりだとか、札幌冬期オリンピック70m級ジャンプで笠谷、今野、青地でメダルを独占したとか、アムラーのメイクは往年の田中真理のそれとそっくりだなどの話をしても通じないこと枚挙に遑がありません。私は奇しくも後述する理由で大学生活が長いわけですが、確かに苦楽を共にした同期生たちは大学内であまりみかけません。また『旭医だより』（私は大学の出版物であるとばかり思っておりました）、『北海道医療新聞』などをちらちらみていると（これ自体が若くない証拠）、どこそこに開業して、家族は妻と子供２人、趣味はゴルフと釣り云々などといった写真入自己紹介コラムを最近多くみかけ、当然ながらそこでの写真の主の肩書は『院長』となっており、驚愕することが度々あります。10年という歳月はひょっとしたら母なる大学の傘下から離れ、独立するといった第二の人生の転機となる年月であるのかもしれません。なるほど編集委員会の慧眼には恐れ入った次第であります。

ところで私はと申しますと、臨床医学と基礎医学両方を齧った経験のある人間であります。もちろん多数の大学院生の諸君もそういうことになるでしょうが、大学院生はあくまで学生であります。内容が伴わずとも両方を助手という肩書で５年ずつ暮らす醍醐味を経験した私のような人間は本学卒業生の中にはあまり存在しないのではないかと認識しております。いつのまにか10年という歳月は私をしてこのような希有な人間にしてしまったのです。このような顛末を10年前に誰が予測したでありましょうか。改めて10年おそるべしであります（後輩諸君！貴君らもいずれ何らかの形で同様の感慨を持つでありましょう）。

さて私はこのような道を歩んできた関係上、どちらの世界の長所も短所もある程度はわかっているつもりでおります。編集委員会もこの辺を狙った人選であったのであろうと想像しております。しかし、ここで両者の長短を述べることはこの文章の意図するところではございませんし、それは全く意味のないことであります。

この10年を過ごした上で得たことといえば、形而下では学位記と耳鼻咽喉科専門医の認定証のみであります。しかし医学の柱である臨床医学と基礎医学の両柱を体験させていただいたことは人生において大変有意義なことでありましたし、かつその間を楽しく過ごさせていただいたという思いが非常に強くあります。まさに限られた人生の中でいろいろなことを少しでも多く経験するということがおもしろく世を過ごす秘訣のような気がします。後輩の諸君には、特に若いうちは『歴史派』より『地理派』となることをお勧めします。

最後にこの場を借りて今まで私を支えて下さった多数の関係者の方々に心より感謝いたします。

（耳鼻咽喉科）

私にとっての日本

内科学第三講座

サントス セベリーノ バルボーザ ドス

私はブラジルから留学しているセベリーノ・サントスです。現在、旭川医科大学大学院博士課程に在籍し、内科学第三講座で研究しています。

私の専門は消化器病学および消化器内視鏡で、1991年からブラジル第3の都市レシフェにある国立医科大学で診療・教育・研究に従事していました。日本での研究を終えてからは、再びこの分野で仕事を続けて行こうと思っています。

日本の文部省から卒後研究員として選抜されてから約5年、当地に来てから3年が経ちました。なぜ自らの研究の地として、日本を選んだかを考えてみると、最も大きな理由は世界的に有名な日本の高い内視鏡診断・治療技術と高性能の内視鏡がすぐ手元にあることが挙げられます。これによって、日本人に多い胃癌において、非常に早期における診断が可能となり、患者の予後の改善と quality of life の向上に直接結びついています。最近では、大腸癌においても同様のことが言えます。

私は、私達ブラジル人は消化器癌の早期診断と治療に関して、日本から多くのことを学ぶべきであると確信しています。その意味で、この大学においてさまざまな設備を使用して研究する機会を与えられたことにとても感謝しています。

私の教室の教授である高後　裕先生には、励ましと有意義な討論をしていただいています。また、研究プロジェクトの直接の指導教官である蘆田知史先生に対しても、現在まで受けている助力と指導に感謝申し上げます。当地での臨床および基礎科学の学習は、私にブラジルに帰ってから成すべきことを教えてくれ、またやる気を与えてくれています。すなわち、患者の病気が進行する前に診断し、治療することによってより良い quality of life を私の患者に授けることです。

ブラジルと日本とは経済・政治の分野でも強い絆で結ばれています。昨年は両国の国交100年記念の年であり、3月にはCardoso大統領が来日しました。また、今年の8月には橋本龍太郎総理大臣が相互訪問のためブラジルを訪れています。

日本のサッカー界では、日本人の選手達と共にブラジル人の選手やコーチ達の存在が多くの影響を与えて、サッカーをより楽しいものにすることに貢献しています。ブラジルには海外で最も多い130万人の日系人が住み、また日本には17万人以上のブラジル人（多くは日系ブラジル人）が住んでいます。

最後になりましたが、旭川医科大学で私の専門分野について研究・学習できた3年間はとても幸せです。

解剖学実習を終えて

医学科第３学年　四十坊克也

４月から３ヵ月に亘った解剖実習を終え早くも４ヵ月が過ぎようとしています。実習は突然と始まりました。三年生最初の講義の日、４月８日午後、一旦講義室に集合した三年生は簡単な説明の後、すぐに解剖実習室に移動しました。あの静けさの中で始まった解剖学実習は今も忘れることが出来ません。

これまで医師を志す先輩達が必ず通った道を、我々が今通らんとしているのを感じずにはいられませんでした。それにも増して、目の前に横たわる尊い御遺体を前にして言葉が出ませんでした。この御遺体はこれから３ヵ月間我々の先生となるのだと考えたら手を合わさずにはいられませんでした。

献体して頂いた御遺体はどこも無駄にはできませんでした。どの部分を解剖するにしても大事に解剖しなければという気持ちが先行しました。そのために実習が遅々と進まなかったことも数多くありました。でも、根気よく続けることがこの御遺体に対する恩返しだと思い頑張りました。

解剖実習は素晴らしいものでした。紙に書いた物よりも何百倍も、いや何千倍も素晴らしいものでした。顔は誰一人として同じではないように、人体の内部も誰１人として同じではないこと、また決して教科書や図譜のようにそのままになっていないことを身をもって実感しました。これは解剖実習を行なわなければ分からないことだったと思います。

解剖実習を行なっていた３ヵ月間はあっという間に過ぎていきました。今思うともっともっと見ておけばよかったと思うことが数多くあります。もっとゆっくり丁寧にやればうまくできたのではと思うこともあります。でも、解剖実習をやっている時点でできるだけのことはやったし、それについては後悔はありません。

実習を終え、医学生としての実感を新たにしています。医学部での学習はようやく半分にさしかかったところです。解剖実習はそのワンステップでしたが、人生を考え、また将来自分達がなる医師を考える上での貴重な体験となりました。

解剖学実習を終えて

医学科第３学年　井上　明子

６月下旬、約３ヶ月半に及ぶ解剖学実習が終わった。お棺の中に横たわる御遺体を前にし、最後に全員で黙祷を捧げた時、私は胸が締めつけられるような想いがした。この３ヶ月半の間に、自分が行ってきた実習の内容を思い浮かべ、実習を通して自分がいかに多くの事を学ぶことができたかをあらためて感じ、御遺体への深い感謝の気持ちでいっぱいになった。同時に、以前にも同じ様に、ぐっと抑えつけられるような気持ちを感じていた事を思い出した。

それは、解剖実習の初日の事である。私は、緊張感や不安を抱えて実習室へ入った。先生からの指示で、御遺体を解剖台の上に運ぶ事になり、私はグループの人達と共に御遺体を持ち上げた。御遺体は、予想していたよりもかなり重く、私はこの時、自分がこれからやろうとしていることの重大さ、大切さをずっしりと感じた。いい加減な気持ちでは、決して出来ないということを実感したのであった。そうして始まった実習であったが、その内容はとても充実したものであった。それまで、実習書や教科書でこういうものであると習ってきた各臓器の大きさ、位置関係などが、個人によって実に様々であることや、それら各臓器が病気によってどのように変容してしまうかなど、本当に色々な事を学ぶことができた。人体は、大小様々な構造から成っており、それらは、普段は目にすることができないものであるため、実習の毎日が、驚きと発見の連続であった。解剖実習は、私達が、今後医学を学んでいく上で、大変ためになるものであろう。この実習で得た、様々な事を、私はずっと忘れはしないだろう。言葉では表せないほど多くのことを教えて下さった、故人の御冥福をお祈りいたします。本当にありがとうございました。

クラブ今昔

空手道部今昔

医学科第4学年　石川　慶大

旭川医大空手道部は2期生の加藤先生、猪俣先生、大西先生を中心に結成されました。所属流派は和道流で、旭川地区和道流支部長である中山先生の門下において発足時から現在に至るまでお世話になっております。発足当初は、現在のように充実した設備のある武道場もなく、練習は大学での練習のほか街中の道場に足を運び、日々技の鍛練をされていた、ということです。

空手道の各種大会にも多数出場し、好成績を収めております。歴代の諸先輩の輝かしい成績をあげてみますと、国体地区予選優勝、同大会3位、東医体3位等、次々とあげられます。

それに続くべく、現在私達も各種大会で頑張っております。最近の成績としては、組手試合におきましては東医体ベスト8、4年石川の国体地区予選3位、3年樋口の地区大会3位の成績から国体強化選手指定の名誉をうけ、また型におきましては1年佐藤が東医体においてかなりの高得点をマークしており、各々の選手が一丸となり空手道部全体がもりあがっております。

練習は、旭川地区和道流中山先生、吉田先生、西田先生、合宿時には藤田先生、国体北海道代表選手である千田先生といった諸先生に、基本から型、組手に至るまで教わっております。また単に空手道の技術ばかりでなく、空手道の〝道〟に表わされるように日本文化の武道としてあるべき精神を日々の修練の中で学んでおります。

現在部員は16名で、練習は通常の週3回の練習と昼休みの週3日の練習を欠かすことなくしております。どの選手も練習時には自分に厳しく、技の鍛練に励んでおります。同じ空手道の仲間として明るく楽しい雰囲気で頑張っております。

これからも各種大会上位入賞、技の向上、精神の鍛練を空手道を通じて修めていきたいと思いますのでどうぞよろしくお願い致します。

聖書研究会

医学科第3学年　豊島　優人

旭川医大聖書研究会は、1980年4月8日に設立されました。その当時のことはよくわかりませんが、私が入学した1994年は毎週木曜日に聖書の勉強会を基本とし、必要に応じて臨時の集会を持っていました。そして大学祭では、映画上映会と講演会を行いました。札幌医大の吉田助教授、キリスト者学生会の波多主事、緑が丘福音キリスト教会のデュエック宣教師をお呼びし、様々な方面からアプローチしたメッセージが学生のみならず外部の方々にも好評でした。

現在は、試験期間中を除き毎週水曜日に聖書の勉強会をしています。

聖書は、3000年にわたり、国境を、民族を、言葉の違いを越えて読まれ続けているたった一冊の本です。そしてこの一冊が人類に与えた影響はとても大きい。

近代科学の創始者のひとりであるニュートンは生涯、徹底して聖書を信じました。科学と聖書が矛盾するとよくいわれますが、彼はむしろ聖書を根底に置いて研究を行ないました。科学者、数学者、作家でもあったパスカルは個人的に聖書をそのまま信じていました。誘導電流を発見したファラデーは「聖書が語るところで我々も語る」という態度を貫きました。

聖書は多くの人が一度手にして開いたことがあると思いますが、とても厚くて途中で投げ出した人もいるでしょう。小さなサークルですが、聖書を読んでみたい方は学生に限らず誰でもぜひ顔を出してみてください。

クラブの今昔について書かなければならなかったのですが、昔のことはよくわからないのでクラブ紹介のようになってしまいましたが、これからも聖書研究会では聖書を読んでいきたいと思います。

研究室紹介

■ 英　語 ■　　講師　内藤　永

平成８年看護学科設置と共に英語研究室は、教官が１名増え、山崎雅人助教授、サイモン・ベイリー外国人教師、そして内藤の３名となった。

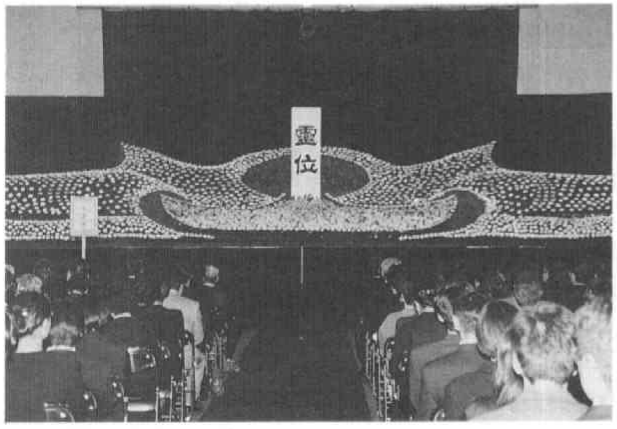
英語研究室は講義実習棟４Ｆにあるが、各教官室はそれぞれ独立し、研究対象もそれぞれ異なる。山崎助教授の部屋には、英語関係の書物に留まらず、言語学一般、中国語の専門書が並んでいる。最近、英語と中国語の比較研究について発表をしたが、そのアイディアは、パッチワークの丘を眼下にしたグライダーの中で生み出されたものだろうか。イギリス出身のベイリー教師の部屋は、ほのかに紅茶の香が漂い、英語教育関係の本が所狭しと並んでいる。カリキュラム以外にも、ＥＳＳ、職員対象の英会話を主催し、ケンブリッジ英語試験委員を務めるなど、英語教育発展に大きく貢献している。かつての一般教育セミナー室が内藤の研究室である。当初テーブル、パイプ椅子しかなかった部屋も、すっかり研究室らしくなった（環境整備に御尽力くださった先生方に心から感謝します）。真新しい書棚にあるのは、生成文法関係の書物ばかりである。まだ空間が目立つ書棚であるが、研究分野の拡張と共に徐々に埋められていくことを期待している。

研究対象がそれぞれ異なるものの、教育面では、三人が「実践英語」という共通のテーマを持って取り組んでいる。ＣＮＮニュース、ＢＢＣ放送、インターネットの記事など、最近のメディアを駆使してリスニング力、速読力の向上を目指す一方で、伝統的に弱点分野と言われている、英会話、そして英作文の指導に力を入れている。受験英語の枠から抜け出ることのできない学生にとって当初かなりの戸惑いを覚えるようであるが、21世紀の情報化社会に対応できる英語力を是非身につけて欲しいと願い、奮闘する毎日である。ＬＬ準備室には、学生が自由に利用できるリスニング教材が準備されていることをお忘れなく!! 美声の持ち主伊林事務補助員がお待ちしています。

解剖体慰霊式

平成８年度解剖体慰霊式が、９月25日(水)午後１時30分から本学体育館において執り行われました。

式に参加した御遺族・御来賓・本学教職員・学生は、本学の教育及び学術研究のために尊い御遺体を提供され、医学発展の礎石となられた129名（病理解剖45名、法医解剖53名、系統解剖31名）の方々の御遺徳を偲び御冥福を祈念しました。　（庶務課）



体育大会実施される

恒例の学生主催による体育大会が、９月４日(水)に実施された。

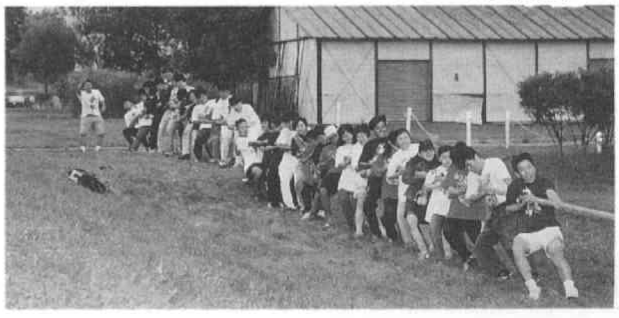
今年は、看護学科の学生も加わったことにより、各種目とも昨年以上の盛り上がりを見せた大会となり、さわやかな秋空の下、学年の名誉をかけて、卓球をはじめ各種目に、賞品のビールなどの獲得をめざし、熱戦が繰り広げられた。

なお、各種目の優勝学年は次のとおりです。

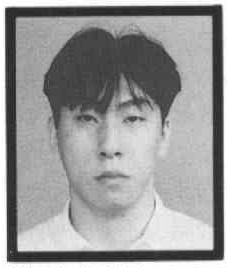
☆☆総合優勝第５学年☆☆

卓　球	男子Ａ	医学１年	バドミントン	混合Ａ	看護１年
	男子Ｂ	５　年		混合Ｂ	看護１年
	男子Ｃ	４　年		混合Ｃ	３　年
	女　子	看護１年	バスケットボール	男　子	医学１年
	混　合	３　年		女　子	５　年
サッカー		５　年	綱引き		５　年

（学生課）



訃　　報



平成８年９月24日㈫、第３学年学生　山田圭一郎君が交通事故のため急逝されました。

山田君は、北海道旭川東高等学校を卒業し、希望に燃えて本学に入学、熱心に勉学に励む一方、課外活動でもラグビー部に所属し活躍するなど明朗、快活な学生でしたが、志半ばで不帰の人となりました。

ここに謹んで山田君の御冥福をお祈りいたします。

（学生課）

旭川医科大学公開講座実施される

本年度の公開講座はニュー北海ホテルを会場に、10月１日から31日までの間実施され、「酒の功罪と健康」のテーマで10回の講義が行われました。

この公開講座は、大学開放事業の一環として、市民に学習の場を提供する目的で毎年行われているものです。

今回のテーマは、内科学第二講座の牧野教授が実施責任者として企画されたもので、10名の講師がユーモアを交えながらわかりやすい講義をし、受講者が熱心にメモを取る様子などから、今回のテーマに対する関心の強さが伝わってきました。

（学生課）

スキー教室参加受付中

恒例のスキー教室（定員40名）を、今年も12月19日㈭～20日㈮の２日間にわたり北大雪スキー場で行います。

締切りが間近（12月10日㈫）です。早めの申し込みを待っています。　（学生課）

教　官　の　異　動

昇任	96. 9.16	集中治療部	講師	藤本　一弘
辞職	96. 9.30	産科婦人科	講師	佐々木公則
昇任	96.10. 1	産科婦人科	講師	林　　博章
昇任	96.11. 1	麻酔科蘇生科	講師	赤間　保之

怒　外

阿　部　典　子

基礎看護学講座より

管理棟１階の図書館の手前左手にある、かつての印刷室が今は「看護学科教官室」と表示されている。そこが基礎看護学講座の教官室である。

基礎看護学講座のスタッフは現在合計３名。旭川医科大学医学部看護学科基礎看護学講座に今年４月に着任したこの３名のそれぞれの背景は異なっている。阿部修子助手は新潟出身。新潟にある総合病院の消化器病棟で看護の臨床を積み、その後看護教育を学んだ。無駄口は一切言わず仕事に黙々と取り組む。映画好きで料理上手、その一方まだ雪の残る３月に新潟から旭川まで車できた行動派でもある。

横山由美子助手は網走出身。旭川医大病院の整形外科、第一内科で今年の３月まで臨床に携わっていた。行動はスピーディで、コミュニケーションスキルに卓越しており、ときには目の表情一つで何かを語っていることもある。

筆者は、札幌出身で、今年３月まで東京女子医科大学看護短期大学で基礎看護学の教育に携わってきた。アメリカで勉強した弊害か、いまだに会話に日本語と英語が混じったり、やさしい漢字を思い出せないことがある。

基礎看護学講座のスタッフ３人は、学生が看護をはじめて学ぶ看護基礎理論や生活援助論Ⅰを担当すると共に、将来に向けて看護学科の基盤をつくるべく看護基礎教育課程４年間の構築にあたっている。

看護基礎教育では社会の急速な変化の中で、その社会に対応し得る基盤や問題解決のプロセスを踏む能力、統合する能力、他の医療者と協力する能力、そして学生が自ら成長していく能力をつけることが求められている。看護基礎教育課程の中でこれらの能力を育成していくには、入学当初から一貫して学生が自ら学ぶ方法と姿勢を形成していかなければならない。そのために我々は、入学して高校までの学習とのギャップに戸惑う学生が、自ら学ぶ体験ができ、自分に適した学習方法がわかり、主体的に学ぶ姿勢を無理なく形成できるような基礎看護学の教育方法を検討し、カリキュラムの中に位置づけていきたいと考えている。

現在おこなっている生活援助論Ⅰでは、学生自身が看護課程を基盤にした生活援助の考え方や、基本技術の演習を通して自ら行動形成していく姿勢・方法を身につけることに力をいれている。

看護学科開設から約半年。授業のために学習環境を整える上で解決していかなければならないこともまだ多い。しかし、スタッフ３人で協力し、学生との相互作用を大切にしながら、教育実践に真摯な気持ちで取り組んでいきたいと思う。

（看護学科　助教授）